



に確認する。

- 6) 研究倫理教育は、研究科・専攻に拠らない一般的な内容についてはeラーニングなどの方法を用いて広く提供し、各専門分野特有の研究倫理については、指導教員を通じて指導することにより補完する。
- 7) 学生調査・アンケート等の結果に基づく客観的な評価指標によって全学的な検証を行い、検証結果を教育内容や教育方法の改善へ積極的に活用し、学生ヘフィードバックを行う。

### 3. 評価

地理学専攻修士課程では、人文科学研究科の定める評価方法に基づいて学修成果の評価・測定を行う。その中でも特に、最終成果の測定方法として修士論文の質を重視する。

#### ● 修了の要件

1. 修士課程に2年以上在学し、30単位以上修得し、かつ、必要な研究指導を受けたうえ、修士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 各年次の履修単位数は、原則として1年次は指導教員の演習4単位を含む20単位以上30単位未満とし、2年次は指導教員の演習を含む4単位以上とする。

年次	必修科目	選択科目	合計
1年次	指導教員の演習4単位	22単位以上	30単位以上
2年次	指導教員の演習4単位		

#### ● 履修上の注意

1. 履修科目の選択にあたっては、指導教員の指導を受け、研究テーマに関連の科目を履修すること。
2. 指導教員が必要と認めた場合には、指導教員以外の演習科目の中から10単位、他専攻の講義科目の中から4単位を上限に履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。
3. 指導教員が必要と認めた場合は、交流協定校[学生交流協定(他大学大学院および大学共同利用機関履修)<P.20>]の授業科目を履修することができる。
4. 他専攻修得単位・他大学大学院修得単位・協定(認定)校留学により修得した単位は合計10単位を上限として、修了に必要な単位として認定することができる。
5. 他系統学部出身者には、当該専攻の基礎学部出身者と同等の基礎学力を充足させるため、大学院の正規授業科目以外に指導教員が必要と認めた場合、学部で開講している関連基礎科目(指導教員の指定する科目)の特別履修を課すことがある。ただし、関連基礎科目の単位は認定しない。
6. 一度単位を修得した科目は、担当者が異なっても再度履修することはできません(指導教員の演習科目を除く)。

#### ● 学位論文について

##### 〈中間発表・報告会〉

修士2年次の9月に中間発表会、修士2年次の1月に公聴会を専攻全体で行う。発表時間は20分、その後10分程度の質疑応答を参加者全員により行う。講評は後日、指導教員から口頭で行う。

##### 〈学位論文審査基準〉

1. 研究課題の学問的な意義と独創性
2. 既往の研究に対する検討の適切性
3. 研究方法と資料の適切性
4. 研究結果に基づく考察・結論の妥当性
5. 論文構成・論理構成の整合性
6. 文章表現および図表表現の適切性

##### 〈論文審査・学識確認〉

審査員は、主査1名、副査2名で構成され、副査には必要に応じて他の専攻、大学、研究所などに所属する専門家を含むことがある。最終試験は、提出された論文を踏まえ、審査員が、口頭試問形式により学識確認を行う。研究内容に関する学問的背景の学識と研究のオリジナリティを重視する。主査・副査の選出は専攻会議にて行う。上記審査基準により、主査・副査が点数を付け、その平均点をもって修士論文の評点とする。成績評価は履修科目と同様の基準で付される。

なお、論文作成要領・提出要領と、提出された論文の取扱いについては、21ページ以降を参照すること。

● ルーブリック【修士論文・課題研究】

DP	評価項目	評価の視点	S	A	B	C
(DP1) (DP2)	1) 研究主題の 設定理由・ 目的の明確性	発展可能性	より重要な研究へと発展 することが確実なテーマ である	より重要な研究へと発展 することが可能なテーマ である	より重要な研究へと発展 する可能性の有無につ てははっきりしない	より重要な研究への発展 する可能性の見込めない テーマである
		目的の明示	研究の目的が明確に述べら れており、その目的のため に当該研究で何をどう進め ていくのかというプランも 明確にされている	研究の目的は述べられて おり、その目的を達成す るためにどのように進め ていくのかもほぼ明らか である	研究の目的はおおよそ述 べられているが、その目 的を達成するためにどの ように進めていくかはや や不明確である	研究の目的が明確には述 べられていない
(DP1)	2) 研究の社会的意義・ 貢献性	研究の社会的意義・貢 献性	現代社会、国際社会にお ける課題の解決や理解の 深化に直接関連するテー マを設定している	現代社会、国際社会にお ける課題の解決や理解の 深化に関連するテーマを 設定している	現代社会、国際社会にお ける課題の解決や理解の 深化にほとんど関連しな いテーマを設定している	現代社会、国際社会にお ける課題の解決や理解の 深化とは無関係なテー マを設定している
(DP2) (DP3)	3) 研究の主体性・ 独自性	独自性	関連する先行研究を網羅 した上で、当該論文の テーマが独創的であるこ とが明確に示されている	関連する先行研究に当該 論文と類似するテーマが ないわけではないが、独 自性を有すると認められ る	すでにほぼ同様のテー マの先行研究があるが、独 自性を有するとも言える	すでに、同様のテーマの 先行研究が存在しており、 独自性は認められない
(DP2) (DP3)	4) 研究方法論の 適切性・妥当性	計画・準備	指導教員との協議を通し て研究計画書を作成し、 研究レビュー、データ取 集、分析、執筆など具体 的な活動をいつ実施する か明確である	指導教員との協議を通し て研究計画書を作成し、 研究レビュー、データ取 集、分析、執筆など具体 的な活動をいつ実施する かほぼ明確である	指導教員との協議を通し て研究計画書を作成した が、研究レビュー、デー タ収集、分析、執筆など 具体的な活動をいつ実施 するかやや不明確である	いつ何をどこまで進める か研究計画が立てられて いない
		研究倫理	研究に関わる倫理上の問 題について、大学が指定 した研究倫理eラーニン グを受講し、十分に考慮 し、必要な対応を済ませ た上で、研究活動を行っ ている	研究に関わる倫理上の問 題について、大学が指定 した研究倫理eラーニン グを受講し、十分な考慮 と必要な対応を行いつ つ、研究活動を行っている	大学が指定した研究倫理 eラーニングを受講した が、研究に関わる倫理上 の問題への考慮・対応が 十分とはいえない	大学が指定した研究倫理 eラーニングを受講して おらず、研究に関わる倫 理上の問題について検討 していない
		研究方法の 適切性	研究目的を達成するた めに最もふさわしいと考 えられる研究方法を選択し ている	研究目的を達成するの に適していると考えられ る研究方法を採用してい る	研究目的を達成するの にふさわしい研究方法で あるかやや疑問である、 あるいは他にさらに適 当な方法が存在している	研究目的と研究方法が合 致していない
(DP2) (DP3)	5) 引用された文献・資 料の十分性・適切 性・妥当性	データ・ 資料の量	研究目的を達成するた めに選択した研究方法、分 析方法を実施するのに十 分適合する量のデータ・ 資料を収集している	研究目的を達成するた めに選択した研究方法、分 析方法を実施するのにほ ぼ十分な量のデータ・資 料を収集している	データ・資料を収集して いるが、選択した研究方 法、分析方法を実施する のに十分な量とはいづ らい	収集した量のデータ・資 料では、選択した研究方 法、分析方法を実施でき ない
(DP2) (DP3)	6) 結果考察の妥当性	結果の表現	結果を適切に表現するた めに、適切な図表等が作 成・配置されている	結果を適切に表現するた めに必要な図表等がお およそ作成されており、ほ ぼ問題なく配置されてい る	結果を表現するために図 表等が用いられている が、必要とはいえないも のや冗長なものがあった り、ないために理解しに くい箇所がある	結果を表現するために必 要な図表等がほとんど作 成されていない
(DP2)	7) 論旨の一貫性・連続 性・論理性	結果の解釈 とまとめ	参考資料や得られたデー タに基づいて客観的で公 平な解釈をおこなってい る。予想や仮説に一致し ない結果も重要な結果と して捉えている	参考資料や得られたデー タに基づいて客観的で公 平な解釈をおこなってい る。予想や仮説に一致し ない結果は例外として処 理している	結果の解釈そのものに歪 曲はないが、一部に予想 や仮説に一致した点だけ を結果として捉えている 箇所がある	予想や仮説に一致する結 果だけを報告している、 あるいは結果の解釈に一 部歪曲が認められる
(DP2)	8) 当該専門分野にお ける先行研究の成果を 十分に踏まえている か	成果の水準	当該分野において、これ まで解決できなかったこ とを解決する知見、ある いは新しい事象の発見を 参考資料や得られたデー タに基づいて提供してい る	当該分野において有意義 な知見や発見を参考資料 や得られたデータに基づ いて提供している	得られた知見が、当該分 野において有意義なもの といえるかどうか、やや 疑問が残る	当該分野において有意義 な知見が得られたとはい えない
(DP3)	9) 独自の研究成果が学 術論文の形式でまと められているか	記述法・ ルール	論文の本文は学術的な記 述法で書かれ、当該分野 の学会で一般的に利用さ れている執筆規定に従っ て書かれている	論文の本文は学術的な記 述法で書かれ、当該分野 の学会で一般的に利用さ れている執筆規定にもほ ぼ従っている	論文の本文は学術的な記 述法で書かれたというに は不十分であり、当該分 野の学会で一般的に利用 されている執筆規定に 従っていない部分がある	論文の本文は学術的な記 述法で書かれておらず、 当該分野の学会で一般的 に利用されている執筆規 定にも従っていない

● 開講科目

科目名称	学習方法	単位数	開講期間	担当者	DPとの関連性			備考
					DP1	DP2	DP3	
地理学特講Ⅰ	講義	4	通年	鈴木重雄	◎	○		
地理学特講Ⅰ	演習	4	通年	鈴木重雄	◎	○		
地理学特講Ⅱ	講義	4	通年	小田匡保	◎	○		
地理学特講Ⅱ	演習	4	通年	小田匡保	◎	○		
自然地理学特講Ⅱ	講義	4	通年	鈴木秀和	◎	○		(本年度休講：在外研究)
自然地理学特講Ⅱ	演習	4	通年	鈴木秀和	◎	○		(本年度休講：在外研究)
自然地理学特講Ⅲ	講義	4	通年	平井幸弘	◎	○		
自然地理学特講Ⅲ	演習	4	通年	平井幸弘	◎	○		
自然地理学特講Ⅳ	講義	4	通年	鈴木毅彦	◎	○		
人文地理学特講Ⅰ	講義	4	通年	土谷敏治	◎	○		
人文地理学特講Ⅰ	演習	4	通年	土谷敏治	◎	○		
人文地理学特講Ⅱ	講義	4	通年	瀬戸寿一	◎	○		
人文地理学特講Ⅱ	演習	4	通年	瀬戸寿一	◎	○		
人文地理学特講Ⅲ	講義	4	通年	王尾和寿	◎	○		
人文地理学特講Ⅴ	講義	4	通年	西山弘泰	◎	○		
人文地理学特講Ⅴ	演習	4	通年	西山弘泰	◎	○		
地誌学特講Ⅱ	講義	4	通年	小野映介		◎	○	
地誌学特講Ⅱ	演習	4	通年	小野映介		◎	○	
地誌学特講Ⅲ	講義	4	通年	高橋健太郎		◎	○	
地誌学特講Ⅲ	演習	4	通年	高橋健太郎		◎	○	
地図学特講Ⅱ	講義	4	通年	田中靖		◎	○	
地図学特講Ⅱ	演習	4	通年	田中靖		◎	○	
地域文化研究特講Ⅰ	講義	4	通年	須山聡		◎	○	経済地理学特講(経済学専攻)と合併
地域文化研究特講Ⅰ	演習	4	通年	須山聡		◎	○	
地域環境研究特講Ⅰ	講義	4	通年	江口卓		◎	○	
地域環境研究特講Ⅰ	演習	4	通年	江口卓		◎	○	
地域調査特講	講義	2	前期	須山聡	○		◎	
地域評価特講	講義	2	後期	須山聡	○		◎	
フィールドワーク	実習	2	前期	須山聡		○	◎	(集中講義)

◎：特に重視している ○：重視している

## (2) 博士後期課程

### ● 目的

地理学専攻は、本学建学の理念に基づき、大学院修士課程修了者、あるいはそれと同等の能力があると認められる者に対して研究指導を行い、地理学のより高度な専門的知識、調査・研究能力を身につけた研究者・専門職従事者を養成することを目的とする。

### ● 修了認定・学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

地理学専攻は、専攻の教育理念に基づき定められた下記の3つの能力を身につけ、所定の必修科目の単位を修得し、博士論文審査に合格した者に対して「博士(地理学)」の学位を授与する。学位取得者は深遠な世界観・学問観と高度な専門知識を有し、新たな知の確立を模索する人材となる。博士論文の基準については学位審査基準に明記する。

DP：ディプロマ・ポリシー

(DP1)	高度な専門分野の知識や技能の活用力
	専門分野に関する高度専門的な学識と、幅広い知見を身につけている。また、それらを総合的に活用する汎用性を発揮し、専門分野における先導者として、地理学を軸として、広く社会に向けて新たな知見や価値を創造・提案し、還元していくことができる。
(DP2)	情報分析、課題設定および問題解決能力
	自立した研究者として、独創的な観点から課題を設定し、専門的な学識や技能を用いながら継続的な研究遂行と研究結果の蓄積・収れんを行うことができる。また、最先端のツールや手法を駆使し、専門情報を収集するだけでなく、それらの分析によって、今までにない知見を導き出すことのできる高度な判断力を有する。
(DP3)	コミュニケーション能力
	学術論文執筆や学会発表などを通じて、自らの独創的な研究結果や新たな知見を国内外の学界に発信すると同時に、他者の考えと価値観を尊重しつつ、専門的な知見から論理的に意見を述べるなど、主体的に協働することができる。また、研究倫理を踏まえ、適切な方法やツールを用いて自らの研究業績を発信し、自ら導き出した新知見の社会的な活用や定着を模索することができる。

### ● 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

地理学専攻博士後期課程においては、指導教員の講義12単位および研究指導を履修する。既往の研究を批判的に検討するとともに、自らの研究蓄積をその中に位置づける。これを基本として視野の広い研究計画を構想する。さらに課題達成のための方法論を立案し、調査および分析を実行する。これらの蓄積の集大成として博士論文を作成する。以上のプロセスを講義および研究指導における教員との議論、国内・国外学会での発表と討論、専門学会誌への論文投稿によって推進する。

さらに、研究における不正行為が行われないよう、カリキュラムの全ての要素の中で研究倫理に関する意識の醸成を図る。

教育内容、教育方法、評価については下記に定める内容に従う。

#### 1. 教育内容

- 1) 講義科目では、個々の研究分野における専門知識の基礎が修得できていることを前提に、最新の学術研究動向を理解し、研究を遂行するための教授と指導を行う。
- 2) 研究指導科目では、専門領域・研究課題に応じて博士論文作成上必要とされる指導や議論を繰り返すことにより、緻密な研究指導を行う。

#### 2. 教育方法

- 1) 講義科目では、豊かな専門知識と発展的な研究能力を深化させ、少人数または個別形式で授業を行う。
- 2) 研究指導では、課題設定の独創性、研究計画の妥当性や現実性について、指導教員から客観的に評価・助言を行う。さらに、学術論文の執筆指導や学会発表の指導を行い、博士論文作成に向けて研究業績を積み上げる。
- 3) 研究指導を中心とする、博士論文の作成指導においては、教員と学生の間で「提出要件」、「学位授与の方針」および「学位論文審査基準」を共有し、密接なコミュニケーションを取りながら実施する。
- 4) 講義科目と研究指導科目は単独に行うのではなく、有機的な関連をもって各学生の研究活動を支える。
- 5) 博士論文の提出については、指導教員が研究の進捗状況だけでなく、地理学専攻が定める「提出要件」を満たしていることを確認する。提出された博士論文の審査にあたっては、主査1名と副査2名以上で構成される審査委員により、「学位論文審査基準」に則り厳格な審査がなされる。最終試験においては、「学位授与の方針」に基づき、学位授与に必要とされる専門的な学識、技能、研究能力、語学力を身につけていることを詳細に確認する。
- 6) 研究倫理教育は、研究科・専攻に抛らない一般的な内容についてはeラーニングなどの方法を用いて広く提供し、各専門分野特有の研究倫理については、研究者として自立して研究を遂行できるよう、研究指導を通じて補完する。
- 7) 学生調査・アンケート等の結果に基づく客観的な評価指標によって全学的な検証を行い、検証結果を教育内容や教育方法の改善へ積極的に活用し、学生へフィードバックを行う。

#### 3. 評価

地理学専攻博士後期課程では、人文科学研究科の定める評価方法に基づいて学修成果の評価・測定を行う。その中でも特に、最終成果の測定方法として博士論文の質と在学期間中の研究業績を重視する。

## ● 修了の要件

1. 博士後期課程に3年以上在学し、かつ、所定の科目(指導教員の講義)について12単位以上修得し、必要な研究指導を受けたうえで、博士論文を提出してその審査及び最終試験に合格しなければならない。
2. 指導教員の講義と研究指導は、毎年履修すること。

年次	必修科目	選択科目	合計
1年次	指導教員の講義4単位および研究指導	任意	12単位以上
2年次	指導教員の講義4単位および研究指導		
3年次	指導教員の講義4単位および研究指導		

## ● 履修上の注意

指導教員が必要と認めた場合は、選択科目として指導教員以外の講義を履修することができる。その場合は、その科目の担当教員の承諾を得ること。

## ● 学位論文について

### 〈中間発表・公聴会〉

2年次の9月に中間発表会、博士論文提出年次の1月に公聴会を専攻全体で行う。発表時間は30分、その後10分程度の質疑応答を参加者全員により行う。講評は後日、指導教員から口頭で行う。

### 〈学位論文提出要件〉

1. 所定の時期に仮論題を提出し、受理されていること。
2. 原則として、博士論文のテーマに関して、査読制度を伴う学術雑誌掲載論文を含む複数の公刊論文があること。

### 〈事前審査〉

提出前に指導教員による事前審査を行う。

### 〈学位論文審査基準〉

1. 研究の背景をなす地理学観の確立
2. 学界および社会一般に対する学術上の貢献
3. 研究課題の学問的な意義と高度の独創性
4. 既往の研究に対する広範囲かつ深い検討とその適切性
5. 研究方法と資料の適切性
6. 研究結果に基づく考察・結論の妥当性
7. 論文構成・論理構成の整合性
8. 文章表現および図表表現の適切性

### 〈論文審査・学識確認〉

審査員は、主査1名、副査2名以上で構成され、副査には必要に応じて他の専攻、大学、研究所などの専門家を含むことがある。主査・副査の選出は専攻会議にて行う。上記の基準により、論文審査を実施する。最終試験は、審査員が、提出された論文に基づき、口答または筆答による学識確認を行うが、研究内容に関する学問的背景の学識と研究のオリジナリティを重視する。外国語試験は予め申請した1か国語(母語は不可)で実施する。審査結果は、研究科委員会において報告される。

なお、論文提出要領等については、25ページ以降を参照すること。

● 開講科目

科目名称	学習方法	単位数	開講期間	担当者	DPとの関連性			備考
					DP1	DP2	DP3	
地理学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	小田 匡保	◎	○	○	
地理学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
地理学特殊研究Ⅱ	講義	4	通年	鈴木 重雄	◎	○	○	
地理学研究指導Ⅱ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
自然地理学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	江口 卓	◎	○	○	
自然地理学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
自然地理学特殊研究Ⅱ	講義	4	通年	平井 幸弘	◎	○	○	
自然地理学研究指導Ⅱ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
自然地理学特殊研究Ⅲ	講義	4	通年	鈴木 秀和	◎	○	○	(本年度休講：在外研究)
自然地理学研究指導Ⅲ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
人文地理学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	土谷 敏治	◎	○	○	
人文地理学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
地誌学特殊研究Ⅰ	講義	4	通年	小野 映介	◎	○	○	
地誌学研究指導Ⅰ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
地誌学特殊研究Ⅱ	講義	4	通年	高橋 健太郎	◎	○	○	
地誌学研究指導Ⅱ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
地誌学特殊研究Ⅲ	講義	4	通年	須山 聡	◎	○	○	
地誌学研究指導Ⅲ	研究指導	—	通年		○	○	◎	
地図学特殊研究	講義	4	通年	田中 靖	○	◎	○	
地図学研究指導	研究指導	—	通年		○	○	◎	

◎：特に重視している ○：重視している